

# 学習者の作文の添削に見る日本語母語話者の文の傾向

— 条件、接続、呼応などを中心に —

水谷 信子

キーワード：母語話者の語感，条件表現，接続表現，呼応，談話の展開

## 0 目的

日本語教育に長くたずさわっていると、日本語の教え方についての情報や研究にはかなりの興味をもつが、日本語そのもの、日本語の音声、構文、語彙などについての反省が時におろそかになりやすい。少なくとも自分自身をふりかえてみると、そういう傾向がないとは言えない。たとえば助詞の使い方、条件を表す「ば、たら、と、なら」の用法などを教えるために一定の分析を行い、説明や練習方法を身につけてしまうと、あとは若者ことばの変化などに気をくぼるだけで、基本的には自分のもつ日本語観の反省をおこたっていることが多い。

こうした反省のもとに、一般の日本語話者あるいは日本語教育に従事している人が、実際にどんな日本語を使っているかを観察した結果をこの小論に述べた。とくに実際の用法を見る時の中心としたのは「条件」「接続」などの表現である。外国語として、あるいは第二言語として日本語を学習した場合、文と文、句と句の接続はとくに習得の困難な作業であろうと考えられる。

これまで、談話の展開の日英対照研究という立場から、「条件表現—えば、たら、となど—の対照」「接続表現—から、ので、けどなど—の対照」「接続助詞—し—の対照」などについて分析を行った結果を、明海大学の『外国語学部紀要』『応用言語学研究科紀要』に発表してきた。その一環として日本語話者の実際の用法を見たいと思う。今回は学習者の作文を日本語話者が添削した例を資料として、日本語話者のあいだにもいわゆる語感に広がりがあることを報告したい。

## 1 資料

### 1-1 資料とした添削例

資料としたのは、『月刊日本語』に筆者が連載した「添削教室」の応募作品である。「添削教室」では、日本語学習者の作文の一部を示し、訂正すべき箇所についての説明を行うことと、全文を自然な文に書き直すことを課題とし、読者のあいだからの投稿を筆者が整理して発表する形をとった。連載は1989年から約10年に及んだが、ここではとくに談話の展開に関連したものを2例とりあげて分析した。

## 1-2 投稿者の構成

投稿者の内訳は日本語教師、主婦、会社員等、学生、その他である。これは日本語に興味をもつ一般人の意識を見るためのよい材料を提供するものであり、また、本学に在学する学生たちの意識とも共通する場合が多いと思われる。男女別では約8割が女性である。職業別・年齢別の分類は表1・表2の通りである。2編の記事を仮に内容別にA（バス）、B（文化）とする。Aの投稿者は52名、Bの投稿者は35名である。

表1

投稿者の職業	A (バス)	B (文化)	ABの平均
会社員等諸職業	15 (28.9%)	13 (37.1%)	32.2%
日本語教師	13 (25.0%)	9 (25.7%)	25.3%
主婦	12 (23.0%)	7 (20.0%)	21.8%
学生バイト	7 (13.5%)	4 (11.4%)	12.7%
記述なし	5 (9.6%)	2 (5.7%)	8.0%
計	52 (100.0%)	35 (99.9%)	100.0%

(ABの平均は人数合計をAB合計の87で割ったものである)

ABは人数に違いがあり人が重なっている場合が2割ほどあるが、ざっと割合を求めると、日本語教師と主婦でほぼ半数をしめ、それに学生バイトと記述なしを加えると約3分の2を占める。なお、性別でいえば、Aは男女12対40、Bは5対30で、ABを平均すると女性が80.5%になる。

表2

投稿者の年齢層	A (バス)	B (文化)	ABの平均
20代	22 (42.3%)	13 (37.1%)	40.2%
30代	8 (15.4%)	7 (20.0%)	17.2%
40代	9 (17.3%)	9 (25.7%)	20.7%
50代	7 (13.5%)	3 (8.6%)	11.5%
60以上	5 (9.6%)	3 (8.8%)	9.2%
不明	1 (1.9%)		1.1%
計	52 (100.0%)	35 (100.0%)	99.9%

(Bに19歳が1名あったのは20代に入れ、Aの71歳の1名は60以上に含めた)

年齢的には20代と30代でほぼ半数を占める構成で、40代をいれば80%に近い。20%強が50代以上の熟年ということになる。

以上、職業・年齢とも全体の数が少ないので分類したり比率を出したりする意味が少ないように見えるが、添削に当たった日本語話者の全体像をいくらかでも明らかにするためと、また言語的傾向との関係がもしあれば見るためである。

## 2 添削例Aにおける接続の用法

### 2-1 課題文

添削の材料としたのは「課題文」とした以下の作文のうち、一部を選んだものである。作文全体を示す。中級程度とされる学習者の実際の作文で、添削の筆が入っていないものである。

バスを待っている間に、電車を乗っている時、日本人は隣にいる人に話をかける人はあまりいない感じができます。しかし中国では先に言った場合があれば、隣にいる人に話をかける人は必ずいます。とくに長い間に列車を乗る時、ほとんどみんなが隣に座る人と話をします。（『月刊日本語95年 7月号』）

課題には2種あり、ひとつは下線部分について300時間程度学習した学習者にわかるように200字以内で平易な説明を行うことで、もうひとつは全体を自然な日本語に書き直すことである。この課題文の場合は「長い間に」「列車を乗る」「長い間乗るとき」などの問題の説明が要求される。また、全体の直しては、そのほかに「感じができます」「話をかけます」などが書き改めの対象になる。

以上も興味深い問題であるが、それは本論では扱わず、「全体を自然な文に直す」の中の

しかし中国では先に言った場合があれば、

の波線の部分をどう書き改めているかを見た。これは「あれば」という条件表現の問題であると同時に、第1文「バスを待っている．．．あまりいない感じができます」に対して「しかし」以下の第2文をどう接続させるかの問題を含んでいて、談話の展開の上で興味のある部分である。

### 2-2 書き改めの実際

この記事では52の書き改め例があったが、わずか10字程度の1語句について、非常に多くの異なりが見られ、日本語の表現の細かい差に驚く思いであった。煩をいとわず列記すれば表3のようになる

表3

1	(この部分を切って、「隣に」に続ける)	2
2	先に言った場合があれば(原文通り)	6
-2	先に言ったような場合があれば(ような追加)	6
-3	先にのべたような場合があれば(言ったー述べた)	2
-4	こんな場合があれば	1
-5	こういう場合があれば	1
-6	このような場合があれば	2
-7	そのような場合があれば	1
-8	そんな場合があれば	1
-9	先の場合であれば	1

-10	先に言ったような場合であれば	1	2計22
3	隣に人がいれば	1	
4	こんな場合だったら	1	
5	このような場合	6	
-2	このような場合には	3	
-3	そんな場合	1	
-4	そんな場合は	1	
-5	そのような場合	4	
-6	そのような場合に	1	
-7	そのような場合には	1	
-7	そんな場合には	3	
-8	そういう場合	2	
-9	そういった場合	1	
-10	先に言ったような場合	1	
-11	先にのべたような場合には	1	5計25
6	そんな時	1	
計		52	

52例の書き直しが26種に分かれたことになるが、これを接続の点で大きく分ければ、2, 3, 4は「れば、たら」という仮定の表現を含むものであり、合計すると24となる。5, 6は仮定を入れず、場合と時をしめすもので、合計26となる。このほか全く切ってしまったものが2であった。

## 2-3 接続表現と語感

### 2-3-1 上昇下降型と直線進行型

2-2の接続の2つの形は

a 「日本では．．．」に対して「中国で同じような場合があれば」

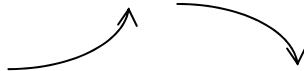
b 「日本では．．．」に対して「中国では」

の2種に還元され、aは仮定、bは対照で続けるものだと言えよう。この2種を選んだ投稿者が24対26とほぼ同数であったのは興味深い。

この区別は談話の展開の上で大きな問題となる。aが

．．．があれば

．．．だ。



と、いわばいったん上昇してから下降するという、ジグザグ型であるのに対し、下は

．．．では

．．．では



といわば直線型で文が進行するものである。

これまでの日英対照分析の結果では日本語には a が多く、英語には b が多い。たとえば

例 1 千円といえば大金だ。

--- A thousand yen is a lot of money. (サイデンステッカー訳)

のように、日本語の原文では「といえば」と条件表現あるいは a 型つまりジグザグ型のものである場合に、英訳では“...is...”と b の直線型が使われることが多い。逆に英語の原文の直線型が日本語訳では a 型になり、

例 2 This knowledge converted them from angry patrons to members of

the team. --- こうして事情がわかってみると、大いに今まで怒っていたお客も、チームの一員としてよるこんで協力してくれた。(安西徹雄訳)

のような場合が半数を占める。(注1)

このことは日常の会話でも観察されることである。たとえば日本語話者が名刺の名前の漢字が特殊な読みを持つ場合など、

「お名前は何と読めばいいでしょう」

というのに対し、英語あるいは中国語の話者は

——お名前の読み方は何ですか。

ということが多いのも同じ傾向を示すものである。

なお、日本語と同じように条件表現が多く使われるのは朝鮮語で、韓国の幼児は条件表現を使い始めるのが早いということ赤塚紀子は指摘している。(注2)

### 2-3-2 投稿者の a 型・b 型

投稿者の選択から a 型と b 型に職業や年齢との関係があるかどうかを一応調べた。

表 4

年齢層別

	a 型	b 型
20代	11	10
30代	4	5
40代	1	6
50代	4	3
60代	4	1
記述なし	1	
計	24	26

年齢別にはあまりはっきり差は現れないが、20,30,40代の総計と50,60代の総計を比べると、a型では16:8であるのに対し、b型では21:4で、わずかな差ながらb型のほうが若年層に傾いていると言える。

表 5

## 職業別

	a 型	b 型
諸職業	9	5
日本語教師	4	8
主婦	6	5
学生バイト	2	5
記述なし	3	3
計	24	26

職業別にはほとんど傾向が見られない。ただ会社員などの職業についている人がa型に多くb型に少ないこと、逆に日本語教師がa型よりb型に多いことがめだつ。諸職業・日本語教師・主婦の総計をくらべるとa型では19:5、b型では18:8で、ここでも違いは見られない。

要するに、職業別にも年齢別にもはっきりした傾向はつかめないということになる。

### 2-3-3 予想と結果

筆者の予想としては、日本文ではa型のほうが談話の展開の傾向として強く、自然な文の流れを作るものために多く使われると考えていたが、今回の観察ではそれが裏切られた形で、a型は半数弱となった。とくにこうした添削では原文に影響されることが多いので、原文の「あれば」を生かすものが多いであろうと予想したのであるが、この予想ははずれた。あるいは添削者がわとしては、むしろ原作に仮定表現があるのを、規範意識から切り捨てる方を選んだのかもしれない。いずれにせよ、このような展開では仮定を含むa型のほうが自然だという筆者の語感には支持を得ることができなかったことになる。

## 3 添削例Bにおける接続の用法

### 3-1 課題文

今の日本の若い人たちが日本の昔のことが知らない。それは残念だと思う。第二次大戦の時、なぜアメリカは京都で原子爆弾を投下しなかった。それは日本の文化を保存したためと思う。もし、今の若い人たちは昔のことを知ったら、京都へ行った方がいいと思う。昔の文化を体験する。（『月刊日本語』95年2月号）

課題「全体を自然な文に直す」を資料とし、とくに最後の部分、「もし」のあとの部分の2文をど

う接続させるかを分析の対象とする。問題を1と2に分け、1では「知ったら」の部分の直し、2では「昔の文化を体験する」の前後にどのような表現を使っているかを見た。広い意味の接続であって、1は条件表現、2は呼応の問題と言ってもよい。

### 3-2 「知ったら」の直しの実際

「知ったら」をそのままにしたものはなかったが、35の投稿例を次の表6に示す。

表 6

1	知りたかったら	14	
- 2	知ろうと思ったら	1	
- 3	知りたければ	3	
- 4	知りたいなら	9	
- 5	知りたいのなら	1	
- 6	知るなら	3	1 計28
2	知ろうとするなら	1	
3	知りたいと思うなら	1	
4	知るために	1	
- 2	知るためにも	1	
計		35	

句末で分ければ「たら」15、「ければ」1、「なら」16、その他が2である。「知るなら」は文意の点で疑問のある形であるが3例あり、投稿者は19,26,28歳といずれも若年層であった。その他は文意の点では問題がないが、「たら」と「なら」がほぼ同数であることは興味深い。年齢別・職業別の差は今回では見られなかった。「たら」が多いのは「知ったら」という原文にひきずられてかと思われるが、これは推測にすぎない。ただ、作文全体の流れからいえば、「知りたかったら」や「知りたいなら」では、若者に欲求があることを期待している含みが入るので、単なる仮定としては「知ろうとするなら」「知ろうと思うなら」のほうが適切であろうと筆者には思われるが、これは少数であった。

### 3-3 文末の呼応

#### 3-3-1 文末の直しの実際

作文の「もし、今の若い人たちは昔のことを知ったら、京都へ行った方がいいと思う。昔の文化を体験する」の「昔の文化を体験する」の文末と文頭に前文とのつながりを表す表現があるかどうかを見た。

表 7

1	昔の文化を体験する（原文のまま）	2
- 2	昔の文化を体験できる	5

- 3	昔の文化が体験できる	1	
- 4	昔の文化を体験することができる。	1	
- 5	昔の文化を見聞できる	1	1計 10
2	体験できるだろう	3	
-2	きっと昔の文化を体験するだろう。	1	2計 4
3	昔の文化を体験するから。	1	
- 2	昔の文化を体験できるから。	3	
- 3	昔の文化を体験することができるから。	1	3計 5
4	昔の文化を体験するからだ。	1	
- 2	昔の文化を体験できるからだ。	1	
- 3	昔の文化が体験できるからだ。	3	
- 4	昔の文化を体験することができるからだ。	3	4計 8
5	なぜなら昔の文化を体験できるからだ。	2	
- 2	そうすれば昔の文化が体験できるだろうから。	1	
- 3	そこでは昔の文化を体験することができるのだ。	1	
- 4	そこでは昔の文化を体験することができる。	1	
- 5	そこでは昔の文化が体験できる。	1	
- 6	それは昔の文化を体験することになるからだ。	1	5計 7
6	昔の文化を体験するために。	1	
計		35	

全体35例が21種の直し方に分散している。

### 3-3-2 接続の傾向

表7の1は文末に何も加えない点では原文と同じで、「できる」「する」で終わっているもので10例に及んでいる。しかも原文の「体験する」という意思を表す形で終わっているのは文意が通じにくい。「できる」なら文意が通じるが、「する」では話が完結していない印象を与える。これは原文に引き摺られたものと解釈したい。3と4は「. . . 京都へ行った方がいいと思う」という前文に対して理由づけの役割を果す「から」などを加えたものであり、5はさらに文頭につなぎの語句を入れたもので、念がいつているとも言えるし、理屈っぽくくどいとも言える。3、4、5を加えると20例に達する。

これに対し1と2の14例は前文に対する理由づけを表現していない。いわば「愛想のない」ぶっきらぼうな展開である。この点については年齢別に見るとつぎのようになる。1、2を「接続なし」3、4、5を「接続あり」とする。



表 8

	接続なし	接続あり
20代	7	5
30代	3	5
40代	3	6
50代	0	5
60代	4	3
記述なし	1	2
計	14	20

全体数が少ないのではっきりした対照は見られないが、「接続なし」には50代がなく、20, 30, 40代を合計すると13になるのに対し、「接続あり」には50代が3あり、20, 30, 40代の合計が15となっているので、しいて言えば壮年層に多いということが言えよう。

表 9

	接続なし	接続あり
諸職業	8	5
日本語教師	2	6
主婦	2	6
学生	2	1
記述なし	0	0
計	14	20

職業面では、「接続あり」に日本語教師と主婦が多いことがめだつが、とくに両者の違いを示すほどのものではない。

数量的な違いははっきりは出ないが、「接続あり」のほうが意の通じやすい構成であることは言うまでもないことで、「接続なし」の投稿者に音読による反省をもとめれば「接続あり」に転向する場合も多いであろうと考えられるが、立証する機会がない。

#### 4 結論 日本語話者の語感

この小論は資料の量も少なく、本来、結論というほどのものを導き出しうるものではないが、観察結果として次のようなことが言える。

- 1) 接続あるいは呼応、つまり談話の展開という点から見た場合、添削者の意識に大きな広がりがあることが分かり、しかもこの観察の範囲内では添削者の年齢や職業などと特にむすびついたはっきりした傾向を見出だすことはできなかった。
- 2) 筆者が自然な展開の違いを示すと考えた a 型 b 型の対立において、予想と一致しない場合が半数を超えることがわかり、いわゆる母語話者の語感として準拠すべきものが、実際は見出だしに

くいののではないかという感想をもった。これは特に談話の展開に関するものであるため、語感が大きく分かれるのかもしれないが、それにしても、文法上の議論をする場合に、ある文を許容するか非文とするかについては、判断のむずかしい場合の多いことを予想すべきではないかと思う。

- 3) いずれにしても、類似表現の多いことは驚くほどである。それは語の単位でなく、文法あるいは語法に関するものである。たとえば「知りたいなら、知りたければ、知りたかったら」のような条件表現の形や、こそあどの「このような、こういう、こんな、そのような、そういう、そんな」のような類似表現の違いなど、視点や文体に関する相違を正確に習得することは、外国人学習者にとって、たいへんな作業であろうと、いまさらのように感じる。

注1 水谷信子『続日英比較話しことばの文法』くろしお出版 2001年

注2 赤塚紀子・坪本篤浪『モダリティと発話行為』 研究社 1998年